

下水道としても—— 2

「尿意ドン」事件

「ヨーイ・ドン」をもじって「ニヨーイ・ドン」。

これは若い人には、なかなか分かってもらえない。

解説すると、中年から初老になると、男女を問わず、いったん尿意を催すと、その切迫感は異常につよく、トイレを捜して、ダッシュして走り込まねばならない。

女性の方は解剖学的に、男性よりもオチンチンがない分だけ、尿道が短いから、こういう時に、しばしば「お漏らし」をしてしまいます。失禁外来が、約10年前でしょうか、名古屋大学病院にできたときは、そんなことまで、医学の領域？とやや違和感を覚えました。いまや、全国の主だった病院には、この失禁外来が設置され、多くの中年女性が押しかけています。

これも一種の「ニヨーイ・ドン」！！ですね??

真面目な話を少しだけすると、中国には、「男科」があつて、これから話題にする、前立腺（男性にしかない）などの症状を診ています。しかし、これらはいずれも「病気」ではなく「老化現象」ですから、医学の守備範囲かどうかは、議論のあるところ。

翻って「病気」と「老化現象」をどう区別するのか、と正面切って質問されたら、答えに窮することも事実で、平均寿命が世界一の長寿国で、経済的にも恵まれている日本なら、ケチケチ言わず、老化現象も医療保険の対象にしましょうよ、ということです。

さてその事件は、還暦直前の頃でしたか、何の用事だか忘れましたが、吉祥寺駅から東京駅にむかうべく中央快速に乗りこんだ時です。腰掛けられると、だいたい本を読み出す私ですが、あれ、ション便したいな～、だけど東京駅ですればいい・・・と思います。

けっこう尿意がつよいな～、ちょっと途中下車してトイレに寄ろうか、でもまあ、東京駅までは「もつ」だろう。本に集中すると、尿意は軽くなる。中野・新宿と、尿意は軽くなったりひどくなったり、迷いながらも、通過してしまう。

次は四谷、ここで降りればよかった。次は「お茶の水」まで、すこし長い。もう尿意が軽くなるどころか、せっぱ詰まってきた。(2ページにつづく)

あれ～、今度は、我慢できる・できない、と言っている水準ではない、猛烈だ、チビッてしまいそう。う～ん、なんだこりゃ、経験したことのない、鋭い尿意。うっー、うーっ。

お茶の水駅で、ドアが開くとダッシュ。まさに「尿意・ドン」！！

幸い聖橋改札口の傍にトイレがありました。

ジッパーを下げ、もどかしくも、チンチンを探る私。あれっ、あんなに尿意が強いのに、チンチン自体は、満ち溢れていない??

ここで解説。

男の子を育てたことのあるお母さんをご存知ですが、子供を後から抱いて、しーしーっと、小便をさせるとき、こどものチンチンは、まるで、小便がそこにも詰まっているかのように、パンパンにふくらんでいます。

男性なら、青年時代の精力に溢れている時の「朝立ち」がそれです。まるで一晩にたまった尿が、そこに溢れているようだ。

しかしこんどはそれと異なって、尿意の強さと、チンチンの状態が全然比例していない?!

むしろ、我慢していた分だけ、自制していた分だけ、チンチンそれ自体も遠慮し、萎縮しちゃっている。

だけど尿意は波のように押し上げてくるのだから、たまらない。ようやく探り当てたチンチンを前に引っ張り出す。そうかプールでながいこと泳ぐとそのあとがこんなだったな、と子供の時分を思い出す。

ようやく落ち着いた。ホッとした。さて、待望の気持ちのよい排尿を!

たしか、お茶の水の男子トイレは、駅舎が旧いから、窓かなにかあって、そこから外の風景が見えたような気がする。まあそれは記憶違いかもしれないが、男子トイレで、ション便をしながら、外の景色を見る、なんていうのは、特権的な男の快樂にはちがいない。

それは、もうチンチンの準備が終われば、鼻歌のひとつも唸っているうちに、それこそ「自然排尿」は行われるもので、その時の、自然に身体がその機能を発揮している感じ、メカニズムが過不足なくはたらいっている感じが、すごく「きもちいい」のだ。

不思議なことに、尿意があんなにせっぱ詰まっていたのに、準備完了レッツゴーなのに、あれあれ??おしっこは出てこない。

これは初体験。前回の40代半ばの「大は小を兼ねない」事件とも違う。やはり前号に書いた、若いドクターだった私が往診したおじいちゃんのように、いまの私になっているのだった。

——以下次号——

タイチーライフ 太極拳的生活・56

〈新年・信念・初心〉・・・3

今回は「白パンの教訓」の解決編です。

どうしたら妥協せずに美味しいパンを人々に提供し続ける事ができるのか？

一番簡単なのは自分が作れる以上にパンを作らないということでしょう。しかし、それでは本当に美味しいパンを一人でも多くの人に提供したいという思いは達成できません。

では如何したら良いかと言うと、パンを増やし続けるのではなく、美味しパンを作れる人を増やし続けるのです。

美味しいパンを自分だけが作り大勢の人や地域に提供するには、おのずと限界があります。しかし、各地に美味しいパン屋さんがあれば、一か所で大量に作り、遠方に運ぶ必要もないので、常に美味しパンが提供できます。

しかしそうは言っても、本人しか作れない「こだわりのパン」だからこそ美味しく、他にないからこそ多くの人に求められている。

ですから、自分と同じ美味しいパンを作れる人を育てるのです。美味しいパンを広めたければ、美味しパンの作り方を広めることこそ大事なのです。

この話を教訓としているのは、太極拳の普及に大変良くあてはまるからです。正しい太極拳を広めようと、生徒をどんどん増やしていけば結局一人一人に対しては浅く表面的な指導になってしまいます。本当に正しい指導を行おうと思ったら、一度に何十人も教える事は不可能です。

ですから正しい技術を持つ指導者がすべきことは、大勢の生徒を集める事ではなく、多くの指導者を育てることなのです。

更に太極拳とパンの違いは、パンは自分で工夫・発見したレシピかも知れませんが、太極拳はすでに先人によって完成・到達したものであって、現代の学習者の工夫や発見を差し挟む余地など一切ないのです。

全ては太極拳の恩恵であるにも関わらず、あたかも自分の手柄のように勘違いしてしまふ「指導者」が多いのです。薄っぺらな技術ほど、盗まれると言って隠したくなるものです。

私は自分の生徒や指導員のみならず、所属や団体など分け隔てなく受け入れ、指導します。私が広めたいのは自分の太極拳ではなく、正しい太極拳だからです。

なによりも危惧するのは、白パンのように不味い太極拳が世に蔓延することなのです。

—以下次号— 太極拳：奈良英治